

最優秀賞

小松祐佳さん 法学部法律学科 4年

「深夜特急2 マレー半島・シンガポール」 沢木耕太郎著 新潮社

迷っている。

悩んでいるとかではなく、本当に、何をどうしたいのか、自分自身わからない。

私が生まれる前に書かれた『深夜特急』の沢木耕太郎も、あるいは、こんな心境だったのではないだろうか。

そんな気になったのは、全6巻あるうちの2巻「マレー半島・シンガポール編」を読んだ時だった。

ある時、思い立って放浪の旅を始めた沢木は、この2巻ではじめて、その理由を語る。そして、全行程の中でこの2巻でのみ、日本にいた時の自分と向き合っているのだ。

長く続く大陸横断の旅の中で、得たものと同じく失ったものがあつたという。はじめは、「日にち」。次に「曜日」、さらに「月」…。それは、いいかえれば「時」の観念であり、一番わかりやすい単位での社会の常識であるような気がした。

いったい今が、いつで、何曜日で何月なのか…？それすらあいまいになってきた2巻の旅のシンガポールで、彼は、こう告白する。

多分、私は回避したかったのだ。決定的な局面に立たされ、選択することで、何かが固定してしまうことを恐れたのだ、と。

そう、沢木は単に「逃げたかったのだ」とすんなり認める。この潔さ。読む者はストンと落ちる。

フリー・ランスのライターだった沢木は、実力を認められ始め、多くの仕事が舞い込むようになってきていた。しかし、どうしてもライターという仕事が自分の天職だとは思えず、それらを捨て、26歳で旅に出た。「男は26歳までに一度は日本から出た方がいい」という友人の言葉通りに。

長い人生の中では、そういう時期があってもいいのかもしれない。というより、そういう時期が必要なのだ。何をしてもなく、ひたすら、ただ逃げてみる時が。

それを日本でやると、いわゆる、フリーターやニート、もっといくとひきこもりになるのだろう。沢木は、それを日本の外でしただけにすぎないのだ。それがこの本のすごさになっている。旅にでた目的が「異文化理解」でも「言語習得」でもなく「逃げ」であったところが。

ただし、その「逃げ」の中で、沢木は実にさまざまな出来事に出会う。

当たり前のように、ぼったくりをしようとする商人に出会うのは、日常茶飯事。かと思えば、何の見返りもなく、タイの街を、慣れない英語で一生懸命に案内してくれる青年にも出会う。またタイに居住したベトナム戦争の元兵士、マレーでは、娼婦のヒモとして、いきいきとしている男たちと出会う。日常では決して出会えない人々と触れ合っていく。

一泊、数百円の宿を渡り歩き、一食数十円の食事をする他は、ひたすら、町をぶらぶら歩きまわる。時に、孤独と、退屈さに押しつぶされそうになりながらも旅を続ける沢木の姿には、世代を越えて共感できるものがある。

作中「二十六歳までに日本を出ろ」の言葉が頭にやきついてはなれない。何も、語学習得や異文化理解などの大義名分をかかげずとも、日本の外へ出てみろと。

世界的に不安定な今、『深夜特急』は、読む者に勇気をくれる。